

論文・レポート作成上のルール

第1回講習マニュアル

1. はじめに：論文・レポートを書くという社会的行為

論文やレポートの執筆は、一定のテーマについて著者が調査・分析・考察した内容を、読者を説得するために論理的に表現する行為です。大学では授業や研究指導（ゼミ）などの中で、皆さんが行った調査や考察の成果を論文やレポートとして発表する機会がたくさんあります。

論文やレポートを書くためには、まず、定められた研究テーマについて、今までにどのような研究が行われているのかについて、書物や論文などの資料に参照する必要があります。同様に、皆さんが行う勉強や考察の成果も、後から同じテーマで調査や研究をしようとする人々に参照される可能性があります。論文やレポートを書くことは、学問的な営みであると同時に社会的な行為でもあり、学問の場において倫理的にそして慣習的に認められたルールに従う必要があります。

とりわけ重要なのが、自分が手がかりとして参照した過去の研究にきちんと言及し、それを適切な形で引用することです。その基本的なルールを以下に説明します。

2. 論文・レポート執筆の基本ルール

論文執筆の基本的なルールについて話をするにあたって、盗用の概念の説明からはじめます。その上で、典拠を示し意見の書き分けを徹底することがなぜ必要なのかを、大学で行う学術行為と関連づけて説明します。

2.1 盗用とは

論文・レポートを書くときには、自分の意見と、他人の意見とをはっきり区別して示すことが大切です。他人の考えや業績（例えば文章、図、絵、写真、統計資料など）を、適切な断り（2.5 節を参照）なしに、あたかも自分のオリジナルの考えや業績として使用するのは「盗用」と呼ばれ、学問研究の世界ではもっとも恥ずべき行為です。

文部科学省によると、盗用とは、「他の研究者のアイディア、分析・解析方法、データ、研究結果、論文又は用語を、当該研究者の了解もしくは適切な表示なく流用すること」（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu12/houkoku/attach/1334660.htm；2016年3月11日）です。みなさん学生の場合は、文科省の定義の「他の研究者の」という文言を「他人の」と読み替えておけばいいでしょう。インターネット上のサイトに公開されている情報の一部やすべてを無断で写し取る、いわゆる「コピー・アンド・ペースト」も、当然その中に含まれます。さらに、(1)他人の書いたレポートに自分の学籍番号や名前を記して提出する、(2)他人に自分のレポートの作成を依頼する、あるいは反対にその作成を引き受ける、(3)同一内容のレポートを複数の異なる授業に提出する、という場合も

盗用あるいはそれと同等の不正行為とみなされます。

人が書いたものを盗用するという事は、社会生活において著作権法に触れる恥ずべき犯罪行為です。犯罪的行為でありますから、試験における不正行為と同様に懲戒処分（退学・停学・戒告）の対象となります（『履修の手引き』p. 20の「試験・レポートについてのガイドライン」を参照）。

盗用は、犯罪行為であるから、倫理上許されるものでないから、してはいけないのですが、なぜ、大学においてそのことをことさらに重視するのか、もう少し学問上の理由について考えてみましょう。

2.2 大学で扱う知識、中高で習う知識

皆さんはこれまでに教科書に書かれた内容を疑ったことがありますか。

おそらく、そのように懐疑的な態度をとったことはないだろうと思います。高校の教科書は文部科学省によって検定され、それが「正しい」ことは（厳密には、判断が揺れる場合はあるでしょうが）保証されています。高校までの学習とは、基本的に確定された知識を学ぶ行為であり、そこで獲得した知識は皆が共有できるものと考えられています。

大学での学びは、それと同じものでしょうか。

大学は学問の場です。そして、学問の目標は、まだ知らないことを知ることです。未知に対する答えはさまざまで、どれが正しいかは不確かです。つまり、取り扱う知識の種類・目的が中高と大学とでは大きく異なるのです。中高では確定した共有可能な知識を習います。それは、たとえば水が1気圧の状況だと100度で沸騰する、というように動かしがたい事実の集積です。その知識は皆が間違えることを恐れず共有できますし、断りなしに使うことができます。

他方、大学で扱う知識は、常に確定されたものとは言えません。大学は、何が正しいのか、どう正しいのか、なぜ正しいのかを明らかにするところです。教壇で教員が述べる内容も、（もちろん最善の努力はしていますが）それが常に正しいとは限りません。正しいかどうかは、皆さんが個々に判断すべきことです。

では、不確かかもしれない知識を扱いながらも、真実に近づく一番効率的な方法はどのようなものでしょうか。学問を団体競技と個人競技に見立てて考えてみましょう。

2.3 学問は団体競技（論拠・典拠を示すことの重要性）

学問は団体競技です。研究者は皆で協力して真理に迫ろうとします。では、皆で協力して効率よく真理に到達するには、どうすればいいでしょうか。

先に述べたように、学問の目標はまだ知らないことを知ることです。正しいかどうかを常に判断しながら考えていく必要があります。だから、他の人が検証しやすいように論文やレポートを書くことはとても重要です。正しいと思える論拠を明示し、論文を読む人が確かめやすいように、自らが主張する内容に対して根拠を示す。それが大事なのです。他人の意見を参考にしたのであれば、ここまでの内容は他の人の意見を参照しましたよ、と自分の意見と他人の意見とを書き分け、その内容についてはかくかくしかじかのソース（引用元）を参照すれば判断できますよ、と出典（引用元の書誌情報）を明記する。団体競技

で生産的に成果を上げていくにはそれが必要なのです。

つまり、他人の意見を盗用する行為は倫理上許されないからやってはいけない、というだけでなく、正しいかどうかを検証するすべを明示しないという点で、皆の進歩を妨げてしまうのです。その意味においても、盗用や根拠を明示しない論述は避けねばなりません。

2.4 学問は個人競技（意見の書き分けの必要性）

学問はまた、個人競技でもあります。これまで様々な競技者（研究者や学生）が留めてきた記録と自分が今出した結果がどのように異なり、自分が達成したことにどれほどの意義があるのかを読む人が分かるように伝えねばなりません。そのためには、どこからどこまでが他人の意見で、そのどこに問題があるのかを明確にせねばなりません。そして、自分の意見が何で、オリジナリティはどこにあるのか、そのどこがいいのかを主張せねばならないのです。そのためには、自分の意見と他人の意見をそれと分かるように書き分けることが、個人競技としての学問では必須となります。

だから、他人の意見を参照したら、その典拠を明示したり、必要に応じて他人の意見と自分の意見を書き分けるために明示的な引用を行ったりすることが必要となるのです。大学という学問の場に身を置く意味を自覚し、それに付随する責任を皆さんが果たすことを切に望みます。

2.5 引用のルール

それでは実際に、何らかの資料を参照してレポートや論文を作成する場合、どのようにその資料を引用し、どのような情報を記載すればよいのでしょうか。引用の形式には、(1) 引用符（「」）でくくる、(2) 改行して本文から切り離して引用する（長い引用文の場合）、(3) 自分の言葉でまとめて紹介する、などがありますが、いずれの形式をとるにしても出典を明らかにしなければなりません。

出典を明確にするための書誌情報は、以下の内容が基本となります。

- (1) a. 著者名
- b. 書名
- c. 出版社（洋書の場合は出版地も記す）
- d. 出版年
- e. 引用ページ数
- f. ネット上のサイトの場合はその URL とアクセス日

「基本」ですから、必要に応じて情報の項目は増減します。これらの情報を、引用箇所の直後に「注」、あるいは簡略化された「括弧内注」の形で示し、さらにレポートや論文の末尾に「参考文献」として記載します。図書館等で参考資料を読んだりコピーしたりした場合は、こうした情報を忘れずに記録しておくことが大切です。

具体的な引用の仕方や、書誌情報の記載の仕方については、前期の終り頃にそれぞれの

専攻語学の授業で時間を割いて詳しく説明します。それ以前に授業の中でレポートの提出を求められる場合もあるでしょうが、その際には担当教員の指示にしたがってください。

3. 資料の検索方法をガイダンスで学ぶ

学術情報センター（大学図書館）には様々な情報が集積されています。論文やレポートを作成するにあたって、学術情報センターが提供するサービスはみなさんの大きな力となるはずですが、学術情報センターとコンピュータ・ネットワークの活用法について、4月中旬に学科やクラス単位でAV教室での実習指導ガイダンスが予定されています。ここでは、図書館の効果的な活用法、さらには、レポート作成やネットワーク活用に活かすためのコンピュータ・ネットワーク活用法に至るまでの講習が受けられます。

上記のガイダンスでは、授業でのレポート提出や本学での大学生活を円滑に行い、大学での教育学的活動を有意義なものとするためになくてはならない知識が提供されます。提供される知識すべてを知っていることが重要ですので、ガイダンスには必ず参加してください。

論文・レポート作成上のルール

第2回講習マニュアル

1. はじめに：論文・レポートを書くことの意味

大学では、授業や研究指導（ゼミ）などにおいて皆さんが行った調査や考察の成果を論文やレポートとして発表する機会がたくさんあります。おそらく卒業までには何十本と書くことになるでしょう。それだけたくさんの機会があるので、論文・レポートを的確に執筆できることは大学生が身につけなければならない必須の資質です。だから、皆さんは論文やレポートの執筆に習熟せねばなりません。それはそうなのですが、論文・レポート執筆に習熟することは、なにも大学生活を順調に送るためだけに必要なものではありません。

論文やレポートでは、一定のテーマについて著者が調査・分析・考察した内容を、読者を説得するために論理的に表現します。この「読者を説得する」と「論理的に表現する」と一平たく言ってしまうと、読者が読んですぐになるほどと納得できるように明晰に書くことは、とても重要です。論文・レポートを的確に書き上げる技術は、一定の課題に対し調査し、客観的に分析し、批判的に考察したことを説得力のあるかたちで論理的に表現できることを指します。この技術は、おそらく現代社会においてどのような職業においても必要なことではないでしょうか。

上司が納得する企画書や報告書が書ける、込み入った用件をスパッとわかりやくメールで知らせることができる、仕事上の問題に対する解決策を理路整然と説明できる、お客様にわかりやすい広報ができる。論文・レポートの執筆はそのような業務の予行演習でもあるのです。将来、自分の仕事で必要となる技術をせっかくですからしっかり磨いてください。そのような意識づけをもって論文・レポートを書くのと、やらなければならない課題だからやっつけて書いてしまうのとでは、結果が歴然と異なってきます。将来の自分のために、自分が考えた内容を明晰な日本語で書ける（もしくは英語などの専攻語で書ける）技術を身につけてください。

残念ながら、論文・レポート執筆の全般——一定の課題に対し調査し、客観的に分析し、批判的に考察したことを説得力のあるかたちで論理的に表現する——についてここで話す余裕はありません。論文・レポートの書き方に関する本はたくさん出版されていますので、その手の本を複数冊読むことを強く勧めます。ここでは、論文・レポート作成上の最低限のルール、つまり、盗用としないためのルールについてお話しします。

2. 論文・レポート執筆の基本ルール

大学で扱う知識は中高で習う知識とは違って、常に正しさが保証されているものではないことは第1回のマニュアルで述べました。そのため、はたして主張内容が正しいのかどうか、読んだ人が検証しやすいように、論拠や出典を明示し、自分の意見と他人の意見をかき分けることが、学術的な文章では重要になります。その意味において、意見の書き分けを軽視し出典を無視する盗用は倫理的に許されないだけでなく、学問の生産的な進展を妨げないためにも避けねばならないのです。盗用をしな

いために、盗用と疑われないために、とりわけ重要なのが、自分が手がかりとして参照した過去の研究にきちんと言及し、それを適切なかたちで引用することです。その基本的なルールを以下に説明します。

2.1 盗用をしない

上述のように、論文・レポートでは、自分の意見と他人の意見とをはっきり区別して示すことが大切です。他人のアイデアや業績（たとえば文章、図、絵、写真、統計資料など）を、適切な断りなしに、あたかも自分のオリジナルのアイデアや業績のように使用するのには、盗用となり、学術研究の世界ではもっとも恥ずべき行為と考えられています。文部科学省の「盗用」の定義は、次のとおりです。「他の研究者のアイデア、分析・解析方法、データ、研究結果、論文又は用語を、当該研究者の了解もしくは適切な表示なく流用すること」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu12/houkoku/attach/1334660.htm)。書物からの書き写しだけでなく、インターネット上のサイトに公開されている情報の一部やすべてを無断で写し取るコピー・アンド・ペースト、いわゆるコピーペも、当然、盗用の中に含まれます。さらに、(1)他人の書いたレポートに自分の学籍番号や名前を記して提出する、(2)自分のレポートの作成を他人に依頼する、あるいは反対にその作成を引き受ける、(3)同一内容のレポートを複数の異なる授業に提出する、という場合も盗用あるいはそれと同等の不正行為とみなされます。

人が書いたものを盗用するということは、アカデミックな場のみならず社会生活においても、著作権法に触れる恥ずべき犯罪行為です。こうした論文やレポート作成上の盗用は、本学でも試験における不正行為と同等の懲戒処分の対象と定められています（「試験・レポートについてのガイドライン」『履修の手引き』を参照）。自分の大事な著作が盗用とされないために、盗用と疑われないために、論文作成の基本的なルールをしっかりと身につけておくことは、大学生活においても社会生活においても大切なことです。

2.2 引用の仕方

それでは実際に、何らかの資料を参照してレポートや論文を作成する場合、どのようにその資料を引用し、どのような情報を記載すればよいのでしょうか。

たとえば、貿易の意義というテーマでレポートを書くとして、ある資料を参照して自分のレポートに次のように書くとどうでしょうか。

それゆえ、これらの品目に関して貿易の意義を評価するには、農産物貿易全体におけるそのウェイトを、より長い期間にわたって確認しておく必要がある、とする主張は、根拠が薄弱であると言わざるをえない。

この書き方では、最後の「根拠が薄弱であると言わざるをえない」という文はレポート執筆者のこぼと受け止められます。また、「これらの品目に関して貿易の意義を評価するには、農産物貿易全体におけるそのウェイトを、より長い期間にわたって確認しておく必要がある、とする主張」という部分は一体、誰がどこで言っている考えなのかが明らかにされていません。

この考えは千葉典による「世界農産物貿易におけるパクス・アメリカナの後退過程・試論：1980

年代を中心に」という論文（『神戸外大論叢』56 巻 1 号、pp. 39-60 に掲載）に示されたものです。このレポートを執筆した学生が元の著者の考え方を正しく自分のレポートに引用するにはどうすればよいでしょうか。ある部分を引用する方法には、以下のものがあります。

- (1) a. カギ括弧（「」）でくくる（直接引用）
- b. 改行し本文から切り離して引用する（直接引用）
- c. 自分のことばでまとめて紹介する（間接引用）

こうした方法で書かれた例を見てみましょう。

2.2.1 カギ括弧でくくる（直接引用）

まずは、鍵括弧をもちいて直接引用を行う場合です。

それゆえ、これらの品目に関して「貿易の意義を評価するには、農産物貿易全体におけるそのウェイトを、より長い期間にわたって確認しておく必要がある」（千葉 2005: 42）とする主張は、根拠が薄弱であると言わざるをえない。

ここでは原著の表現をそのまま引用した部分を引用符（カギ括弧）でくくることで明示し、さらにその後著者名、資料の出版年、ページ等の情報を丸括弧に入れて示しています。この操作のおかげで「確認しておく必要がある」というのは千葉の意見であり、「根拠が薄弱であると言わざるをえない」としているのはレポートの執筆者であることが判別できます。なお、論文等で直接引用を行う場合、引用部分の表現は一字一句変更してはいけません。原文に間違いがある場合でも、「(原文ママ)」や(英文であれば)「[sic]」という注記を間違いの後に施してそのまま引用することが慣習として行われています。

直接引用は、意見の書き分けに厳密さが要求されるときや原著者（被引用者）のことばをそのまま伝えることによって原著者の主張内容がより明確になるときなどに用います。どのようなときに直接引用で行うのが効果的なのか、よく書いていると思える論文を見つけたら、その引用方法を参考にしてください。

2.2.2 改行し本文から切り離して引用する（直接引用）

直接引用の分量が多くなるときや原著者のことばをことさらに際立たせたいときは、改行した上で引用部分を右に寄せて本文から物理的に切り離すこともあります。

それゆえ、これらの品目に関する千葉の次の指摘には問題を感じる。

貿易の意義を評価するには、農産物貿易全体におけるそのウェイトを、より長い期間にわたって確認しておく必要がある（千葉 2005: 42）

このように千葉は慎重な姿勢をとるが、素早い判断を求められる現代の時流からするとこの姿

勢はいささか…

もっとも、上の例のような文脈ではわざわざ改行して本文から切り離す必要はないでしょう（例示のために無理やり作文しました）。この場合は、2.2.1 節で示したように本文においてカギ括弧を用いて引用するのが妥当だと思います。

2.2.3 自分のことばでまとめて紹介する（間接引用）

先行研究への言及は直接引用でなければならない、ということはありません。自分のことばで取りまとめてスピーディーに議論を展開することも可能です。間接引用は直接引用と異なり、すべて自分のことばで記述しますが、他人の考えに言及していることが文面から理解されることと、その他人の考えがどこからとられたのかを明示していることが重要です。

それゆえ、千葉が主張する、これらの品目が農産物貿易全体に占める割合を、さらに長い期間検証しなければ、その貿易上の意義は正しく評価できない（千葉 2005: 42）という主張は、その根拠が薄弱であると言わざるをえない。

先ほどの直接引用の例とは異なり、原著者の主張内容を理解した上で自分のことばで書き直したり要約したりすることもしばしば行われます。どのような場合にどの引用を行うのが効果的なのか、手本にすべき論文を見つけたら、よく読んでそのあたりの呼吸をつかむように努力してください。

さて、上の説明で（千葉 2005: 42）という表記がたびたび出てきましたが、これは論文の巻末にあげる参考文献表に挙げられた論文—千葉が 2005 年に書いた論文—の 42 ページの記述が典拠となっていることを示すものです。本文で書誌情報をいちいち示す手間を省くための略記法です。言及したい文献に対してこのような略記法をとる場合は、巻末の文献表は、著者名、出版年、論文名の順で記し、略記された文献が一目で分かるようにする必要があります。次節では書誌情報をどのように記載するのか、その方法の一例を見ていくことにします。

2.3 書誌情報の挙げ方

参考文献の書誌情報の挙げ方は、研究分野によって異なりますが、書誌情報の挙げ方はおおむね以下の原則に従います。

- (2) a. 文献を図書館などで入手するのにじゅうぶんな情報が含まれている
- b. 同一論文中で、参考文献の挙げ方が統一されている
- c. 文献情報の挙げ方が当該研究分野の慣習に従っている

参考文献表は読者の便宜を図って書くものですから、その表記がバラバラではいけません。文献の挙げ方は統一し、読者が必要とする情報—著者名・出版年・書名・出版社名・（論文の場合）掲載ページ数など—を示します。その際、それぞれの分野での慣習に従うことが求められますが、当該分野の慣習的表記法がよくわからないときは、とりあえず上の (2a) と (2b) の原則に従って書いてください（その上でわからないことは授業担当者に質問してください）。書誌情報の挙げ方のルールは、慣れな

いと煩雑に思えるかもしれませんが。しかしこれは、自転車に乗る技術と同様で、一度慣れてしまえば後は簡単に行えます。逆に (2) から外れた表記を適当に行っていると、きちんと勉強したことがないことをさらけ出すことになってしまいます。

以下に参考文献表の例を挙げます。繰り返しますが、研究分野によって書誌情報の挙げ方は異なります。また、同じ研究分野でもバリエーションが存在します。皆さんはまず、参考文献表の情報がすべて読み取れるかどうか注意してください。また、自分で参考文献表を作る場合は、(これも繰り返しますが) 上の (2a) と (2b) の原則を守っているか気をつけてください。なお、以下の表記法は言語学の分野でよく用いられるもので、「(千葉 2005: 42)」のように文献の簡略表記を行うことを前提としたものです。

文献表の例-1

- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論：生態心理学から見た文法現象』 東京大学出版会。
- 益岡隆志 (2006a) 「日本語から外国語を見る」 『日本語学』 2006年3月号、6-15。
- 益岡隆志 (2006b) 「「～タイ」構文における意味の拡張：願望と価値判断」 益岡隆志・野田尚史・森山卓郎 (編) 『日本語文法の新地平 2』 くろしお出版. pp. 63-76.
- 山口治彦 (2013) 「『アバター』に見るキャスティングの偏り」 『談話研究室によろこそ』 第48回、三省堂ワードワイズ・ウェブ (<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/2013/03/07/談話研究室-『アバター』に見るキャスティングの/>). 2016年3月14日アクセス。
- Hoshino, N. and J. F. Kroll (2008) "Cognate effects in picture naming: Does cross-language activation survive a change of script?" *Cognition* 106, 501-511.
- Nasu, Norio (2012) "Topic Particle Stranding and the Structure of CP." Aelbrecht, Lobke, Liliane Haegeman, and Rachel Nye (eds.) *Main Clause Phenomena: New Horizons*. Amsterdam: John Benjamins. pp. 205-228.
- Sanz, Montserrat (2000) *Events and Predication: A New Approach to Syntactic Processing in English and Spanish*. Amsterdam: John Benjamins.
- Zamma, Hideki (2009) "Exceptions or a Category: a Numerical Investigation of Classhood in English." *JELS 26: Papers from the 26th Conference of the English Linguistic Society of Japan*, 359-368.

文献表は、原則として著者の姓 (family name) のアルファベット順に並べます。和文献だけの場合であれば、たいてい 50 音順で並べられます。統一がとれていることが大切です。著者の姓の順にするのは検索を容易にするためです。欧文表記の場合、Montserrat Sanz という名前を "Sanz, Montserrat" というように姓の後にコンマを打って表記します。

もっとも、先ほども述べたように、書誌情報の挙げ方は研究分野や個々の出版社や学術雑誌によって異なります。たとえば、英文学の研究では以下のような MLA と呼ばれる様式が主流です。

文献表の例-2

- Eglinton, Mika. 'Interlude: Asian energy versus European Rationality: Interview with Ninagawa Yukio.' *A History of Japanese Theatre*. Ed. Jonah Saltz. Cambridge

University Press, 2016: 532-35.

Eglinton, Mika. "'Thou art translated': Remapping Hideki Noda and Satoshi Miyagi's *A Midsummer Night's Dream* in Post-March 11 Japan.' *Multicultural Shakespeare: Translation, Appropriation and Performance* (2016) 51-72.

エグリントンみか「野蛮なる新世界：『テンペスト』という帝国の言語、言語の帝国」、『言葉という謎 英米文学・文化のアポリア』新野緑、御輿哲也、吉川朗子編、大阪教育図書、2017年、123-40頁。

エグリントンみか、「原子力とメディアと芸術の相同性から内破へ 水戸芸術館 高嶺格の『クール・ジャパン』試論」、『シアターアーツ』56号（2013年秋号）60-63頁。

いずれにせよ、(2) で挙げた要件が満たされていることが重要です。それでは「文献表の例-1」にもとづいて個々の項目について解説します。

2.3.1 単行本の場合

本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論：生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会。

Sanz, Montserrat (2000) *Events and Predication: A New Approach to Syntactic Processing in English and Spanish*. Amsterdam: John Benjamins.

本文中で「本多 (2005)」 「Sanz (2000)」 というふうに略記をする場合、単行本の文献情報は執筆者の姓 (family name)、名 (first name)、出版年、書名、出版社の順に挙げます。文献が和書ならば書名は二重カギ括弧でくくり、洋書の場合は書名をイタリック体にします。洋文献の場合、「Amsterdam: John Benjamins」のように、出版社の前に出版地を記すことがふつうです。一体どこの出版社なのかかわからないことも多々あるからです。

2.3.2 論文集など単行本所収の論文の場合

益岡隆志 (2006b) 「「～タイ」構文における意味の拡張：願望と価値判断」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎 (編) 『日本語文法の新地平 2』くろしお出版. pp. 63-76.

Nasu, Norio (2012) "Topic Particle Stranding and the Structure of CP." Aelbrecht, Lobke, Liliane Haegeman, and Rachel Nye (eds.) *Main Clause Phenomena: New Horizons*. Amsterdam: John Benjamins. pp. 205-228.

まず、益岡 (2006b) について解説すると、文献表の中に益岡隆志による業績が2本、しかも同一年に出版されたものが挙がっています。この場合、出版年の後ろにアルファベットをふり、「益岡 (2006a)」 「益岡 (2006b)」のように区別します。論文名は1重カギ括弧でくくり、コロンの後が副題です。「益岡隆志・野田尚史・森山卓郎 (編)」とあるのは、『日本語文法の新地平 2』という書籍の編者がこの3名であることを示しています。「pp. 63-76」はその本の63ページから76ページにこの論

文が掲載されていることを示します。ページ数が複数にまたがる時は、単に「p. 」とせず、このように「pp. 」とするのが慣例です。

欧文で書かれた文献の場合、論文名はしばしば 2 重の引用符「"」でくくります。引用符を付さない表記法もあります。「Aelbrecht, Lobke, Liliane Haegeman, and Rachel Nye (eds.)」とあるのは、編集者が Lobke Aelbrecht, Liliane Haegeman、そして Rachel Nye の 3 名であることを表します。この表では、第 1 著者（编者）のみ「姓、名」の順序で示す¹ことにしているので、Aelbrecht さんだけ名前がひっくり返っています。「(eds.)」とあるのは editors の略記です。编者が一人だと「(ed.)」（editor の略）となります。

2.3.3 定期的に刊行される学術雑誌などに掲載された論文の場合

益岡隆志 (2006a) 「日本語から外国語を見る」『日本語学』2006年3月号、6-15.

Hoshino, N. and J. F. Kroll (2008) "Cognate effects in picture naming: Does cross-language activation survive a change of script?" *Cognition* 106, 501-511.

Zamma, Hideki (2009) "Exceptions or a Category: a Numerical Investigation of Classhood in English." *JELS 26: Papers from the 26th Conference of the English Linguistic Society of Japan*, 359-368.

益岡 (2006a) は『日本語学』という学術雑誌の 2006 年 3 月号の 6-15 ページに掲載されました。学術誌については、「pp. 」を省くことが多いようです（単行本の場合も「pp. 」を省く表記も時折見られます）。同様に、Hoshino and Kroll (2008) は、*Cognition* という学術誌の第 106 巻、501-511 ページに掲載された論文です。Zamma (2009) は、日本英語学会 (Linguistic Society of Japan) の第 26 回大会の発表論文集に掲載されています。

2.3.4 そのほかの文献の場合

山口治彦 (2013) 『『アバター』に見るキャスティングの偏り』『談話研究室によろこそ』第 48 回、三省堂ワードワイズ・ウェブ

(<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/2013/03/07/談話研究室-『アバター』に見るキャスティングの/>). 2013 年 3 月 7 日.

山口 (2013) は「三省堂ワードワイズ・ウェブ」というホームページ上に「談話研究室によろこそ」という連載の第 48 回目の文章としてアップされたものです。（ちなみに、『アバター』は映画の題名なので書名と同様、二重カギカッコでくくってあります。）ホームページは、時間とともに更新されていくものですから、URL とアクセスした日付を記すことがよく行われます（この場合はアップロードされた日付を入れました）。ネット上からなくなる心配もあるので、資料として用いる場合はハードプリントするか、ファイルに保存しておくといいでしょう。

¹ すべての编者を「姓、名」の順で示すと、「Aelbrecht, Lobke, Haegeman, Liliane, and Nye, Rachel (eds.)」となってしまい、第 2 编者の姓名がわかりにくくなるからです。

また、上では挙げませんでしたが、新聞記事を参考とすることもあるかもしれません。記名記事と著者がわからない場合の例をそれぞれ挙げておきます。

中嶋嶺雄 (2008) 「「複言語」教育の導入を一グローバル化時代の英語力」『朝日新聞』(2008 年 12 月 18 日付)

『朝日新聞』「社説」(2009 年 1 月 19 日付)

文献・資料の形態は様々なものが考えられますので、それを網羅することはここでは控えますが、重要なのは、上でも述べたように、文献を図書館などで入手するのにじゅうぶんな情報が順序よく挙げられていることと、同一の論文・レポート内で参考文献の挙げ方が統一されていることです。